

私死の告知啓事

—糟谷孝幸追悼集—

情況の中で苦惱する
己自身を見つめる時程
むなしいものはない。
自己保身にのみ
すがりついて
閉塞状態におちいつている。
我々にとってはなく
僕にとっての“未来”は
何であるのか、
我々にとっての“未来”は
我々の後に続いてくれる
“誰か”があるということなのか。

10・21の大阪は
静かな葬式行列ではなかったのか。
参加したもの、あるいは
秘かに期待を寄せていたものの
全てを——裏切った。
消耗しない方が
おかしいではないか。
僕は
——政治的人間になる——
ことはできない。
でも、僕を含めて消耗した人達を
その苦惱から救ってやるには
ぜひ、11・13に
何か佐藤訪米阻止に向けての
起爆剤が必要なのだ。

犠牲になれというのか。
犠牲ではないのだ。
それが、僕が人間として
生きることが可能な
唯一の道なのだ。

抑圧する者——全てに——
災いあれ！

1969.11.8

糟谷孝幸



市民社会は、不ラチにも「生活の重みを知らない者の暴力」
として、反撃し、あるいはあざ笑うことによって、そのみだ
らな欲望の体系を維持しようとしてきた。学生の絶叫に耳を
傾け、少しでも良心的たろうとする人々も、逆に彼らの身軽
な生活にひそかな羨望を投げ、職業革命家という身分に、ロ
マンティックな思いを託すなどという無内容な自慰行為にふ
けてきたのではなかったか。

いま、われわれは学生諸君の絶叫を単なる言葉の空転とし
て上滑りさせてしまった、ほかならぬわれわれ自身の責任を
深く反省し、市民社会の深みに生息する人間であればあるほ
ど、まず自己の生活実体を地殻変動させる突破口をみつける
作業に邁進しなければならない。

そんなふうに考えているぼくにとって糟谷君の死の意味は、
ことのほか重要なものであると思われるのだ。それは、並み
はずれた英雄でもなく、思想家でもなかった「平凡な人間の
権力の虐殺による死」ということの意味である。

樺さんの場合でも、山崎君の場合でも、あるいは奥浩平君
の場合でも、必ずといっていいほど、英雄か、思想家か、何
か人並みはずれた、死なせてはまことに惜しい人の死と語ら
れたものだ。「美人薄命」、「死は死せる人の一切を浄化し、
仏となす」日本人固有の死に対する習俗のようなものが、必
ず「政治の中の死」に通俗的な尾ヒレをつけてきたという感
じがぬぐいきれないのだ。

今度こそそうしてはならないと思う。特別に並みはずれた非
凡な人の政治の中の死という総括の仕方は、最も悪質な方法
で、故人を裏切るものである。なぜなら非凡な人の死は、平
凡なわれわれに対し、平凡であるが故にノウノウと生きるこ
とを許してしまうことになるからである。そうであってはな
らない。

平凡な男が権力によって殺されるほどの闘いをしたのだ。
権力がその平凡な男を殺さねばならないほどの闘いを展開し
たのだ。

〈樺嶋正法・朝日ジャーナルより転載〉

糟谷死亡経過概要報告

今秋期安保政治決戦を捉え返すことは、とりもなおさず、
糟谷の死亡を自らの問題として捉え返す作業でなければなら
ないだろう。今秋期安保政治過程が我々に投げかけた生きる
闘いの重さは、糟谷の死に凝縮した形で露呈している訳であ
るが、この極めて歴史は位置の中で重要性を帯びてくる闘い
を総括するために彼の死に至る経過を報告しておく。

今秋期安保政治決戦の最大環として設定していた一〇・二
一 佐藤帝国主義政府打倒中央闘争が、国家権力の暴力キャン
ペーンとゴーストタウン化戦術の中で実力部隊と大衆部隊の
結合が組織されず、街頭反乱を圧倒的に組織して政府中枢に
攻め登る闘いが十分展開されなかった状況を捉えて、我々は
「繰り延べられた決戦」として一一・一三全国街頭反乱闘争
を提起した。訪米以前に訪米不可能な政治危機を創出すべく
最後の可能性を追求しようとした大阪での闘いが、一一月一
三日「佐藤訪米実力阻止、一月安保決戦勝利全関西労学市
民決起集会」(全関西統一実行委員会主催)として大阪市北
区扇町公園で開かれた。

この日糟谷は、同集会に参加した後、労学合同軍団の一員

として国家権力機動隊との実力闘争に決起した。

午後六時三〇分頃、実力闘争部隊の最前線で闘っていた糟
谷は、扇町公園前府道扇町線南側水道局前で、当日大阪寝屋
川署から派遣されていた特別機動隊第二大隊第三分隊の荒木
幸男・赤松昭雄、杉山時史の三名によって逮捕された。逮捕
時は、ヘルメットを脱がされた頭上に相当程度の暴行を加え
られたと後の情報によって推測されるが、その後、歩かされ
て約四〇〇m離れている曾根崎署に連行された。曾根崎は重
傷の糟谷を強権的写真撮映し、取調べを強行したが、その際
糟谷は「黙秘します」と二度答えた後、気分が悪いと訴えて
頭をかかえこんで倒れた。更に曾根崎警察は半ば意識不明の
危険な状態にある糟谷を約二時間近くも放置した後、午後八
時四〇分になって市内北区浮田町の行岡病院に運び込んだ。
この行岡病院は以前から警察御用病院として機能し、一般的
な評判も悪く、しかも院長行岡忠雄は自民党府会議員であり
多くの自民党の代議士との親交もある病院であるばかりでな
く、脳外科の専門医も、そのために適切な設備も備えられて
いない病院であった。

同日午後一時頃、関西救援連絡センターが国家権力に不
当逮捕され、更に重傷のまま、放置されていた糟谷(後で身
元確認される訳でこの次点では身元不明の被疑者・曾根崎署
四号としてである)のを知り、直ちに医師と弁護士に連
絡をとり救援活動を始めた。

一四日午前一時二〇頃、樺島正法弁護士、葛岡亨医師と救援連絡センターの数名が行岡病院におもむき面会を要求した。逮捕後、糟谷は救援連絡センターの弁護士を選任していたし、頭蓋骨折という生命にかかわる重傷のため、当然専門医による追せきの必要があった。しかしながら、弁護士・医者による面会を要求したにもかかわらず、行岡病院側は、看護婦を応対に出して「警察の身柄をあずかっている訳だから、関係者以外に面会させる訳にいかない。」の一点ばり、全くの玄関払いをくわせようとしたが、根強い抗議の末、ようやく同日午前二時二十分に糟谷に会うことができた。この時糟谷は意識不明の状態（後に判明した訳だけれども、彼は午前〇時頃から意識が混濁していき、午前一時までに完全に意識不明の状態に陥ち入っている。逮捕後意識不明に落ち入るまで、権力と病院側は糟谷に何ら処置を施すことなく放置されたままであった。）で、手術台の上に横たわっておりその時の状況を葛岡医師は次のように語っている。

「午前二時二〇分頃から三〇分頃まで糟谷君の状態をみた。担当の行岡病院の松木医師の態度は非常に非友好的、挑発的であり、誠意ある態度を示してくれなかった。その時点での患者の状況を、松木医師は、レントゲンの頭部の撮影で、左側頭部の頭蓋骨亀裂骨折で陥没骨折はないし、脳の障害については硬膜外出血か脳内出血があるのか、脳挫傷があるのかについては今のところでは不明であり、そのことをはっきり

するために今から脳血管撮影をやるうとしていたのであって、そのために麻酔をかけている、と説明し、もし硬膜外出血があれば開頭手術を行うと語った。更に、運ばれた最初の時点では、彼は「扇町でやられた」とか「むかついてきた」ということを返事したらしく、その過程で意識の程度も落ちてきた、という様なことを言ったわけです。ただ、どういう経過をたどって意識の程度が落ちてきて、最終的に麻酔をかける段階、あるいは意識障害の時間的経過などは聞けませんでした。その時点においては、血管撮影は行われていませんでした。」

この時点で判明したことは、この種の負傷では必ずしも血管撮影を行なうのが半ば義務づけられているにもかかわらず、行岡病院に収容された一三日午後八時四〇分より更に五時間近くも実施されておらず、樺島弁護士・葛岡医師の追求に対して、「血管撮影は今からやるところだ。」などと見えすいた逃げ口上を言う始末であった。

一四日午前四時二〇分頃、行岡病院にかつきこまれて約八時間経過の後ようやく手術を開始したが、この手術は全く権力の手中でひそかに進められたのである。（四、一二機動隊学内導入の時、その闘争の中で重症を負った有本警官が手術を受けたのは、病院に収容されて二時間とたったいなかったことを付記しておく）ところで、手術を行なった行岡病院の松木医師は脳外科の専門医ではなく、整形外科医であったし、

この病院には脳外科は設けられていなかったのである。すなわち、物的にも、人的にも何ら設備のない病院へ糟谷をひき渡し、病院側もただちに設備のある病院へ移す（この行岡病院のすぐ近くには、警察とよく通じている北野病院があり、ここには脳外科の設備が完備されており、更に脳外科の専門医が常時動きのとれる体制にしかれていたのである）ということもせず、まさに国家権力（大阪府警と御用病院の一体となった闘う部隊）糟谷に対する弾圧が露骨に表わされていることが確認できるだろう。

同日午前六時二〇分頃、権力の手のみによって一方的に行なわれた手術が終了した後、同日午前六時三〇分頃、行岡病院、国家権力の不当な処置に対して、京大病院脳外科専門医佐藤医師が「糟谷君の処置に対して専門医の立場から援助したい」と申し出たが、病院側は看護婦を応対に出しただけで全くとり合わなかった。

同日午後一時頃から糟谷の容態が悪化し、危篤状態に落ち入っていく過程で、身元の確認をどうしてもすることのできなかった警察と病院は困り果て遂に救援連絡センターに面会を許可した。人びとが面会に行った時は既に糟谷は自力で呼吸することもできない状態であり、糟谷の身元が確認されたのは同日午後五時過ぎであった。そしてその数時間後、同日午後九時、糟谷はついに帰らぬ人と化してしまった。

その後、救援連絡センターの要求によって再度の身元確認

が行なわれ、同時に、我々の質問に対して次の様に答えた。

「生前の糟谷君の左側頭部に幅一・二cm、長さ四〜五cm程のはぼ平行に走った二つの条痕がみられた。その状態は、鉄棒とか、転倒した負傷ではなく、その様な幅をつける、鈍器」でなぐられたものだ。」

一五日前〇時、糟谷の遺体は司法解剖のために、阪大病院法医学教室に運びこまれる。同午前一時三〇分から法医学教室の松倉教授が執刀し、司法解剖に付され、五時三〇分に終了した。敵権力は強引に司法解剖を行なおうとしたが、阪大病院法医学教室の松倉教授が両親と話し合い、弁護士、家族の立会いを認めさせ、樺島・松本両弁護士と関西救援連絡センター推薦の佐藤医師（京大配学部付属病院）などが立ち会った。

この解剖の結果、死因は脳機能障害、脳挫傷、脳腫脹頭部打撲であり、遺体の状況は硬い鈍低による打撲、皮下出血右下肢十数ヶ所、同右下肢部十数ヶ所、鼻部出血一ヶ所、頭頂部直径一〇センチの円形出血であったことが確認され、頭蓋骨骨折、亀裂骨折はともになく、骨の縫合部にずれが生じていた。

以上で糟谷の逮捕から死に至る事実をできる限り正確に報告してきたが、全体的に判断すれば、彼が権力と警察御用病院の手によって虐殺されたことが明確になるだろう。最後に、一貫して糟谷の救援活動で当たってきた関西救援連絡センタ

一の松本弁護士の今後の闘いの方向性に関する談話を付記しておく。

「解剖結果やテレビ報道、医師の判断などから、現在考えられることは、糟谷君を警官である下手人がうつぶせに地面に押さえつけ左手で彼の腕をねじふせ首をつかまえ、右手でもって警棒で乱打したものとみられる。

あの情況で学生が奪還に行くことは考えられないが、この推定は警察の、学生が糟谷君を奪還にきたので楯で防戦した、という発表と一致する。頭部の二つの傷が平行してついていたことは、糟谷君を押さえつけて動けないようにしてなぐったことを示している。身の傷の場所から見ても、うしろから彼をくみしいたことがわかる。

解剖所見の凶器が鈍器ということは、鋭利な刃物でないということだ。

このことで警察が殺人事件をデッチ上げる危険性は、彼らが火焰ビン説を流していることからみても、ありうることで、目撃者を探し、困難ではあるが報道機関の協力をも求め、警察の逮捕時の暴行の事実を証明し、彼を逮捕した三人の警官と指揮者の責任を追求したい。少くとも、彼らの告発し、罷免訴追にまでもっていききたい。」

文責 速水 昭

疾走のあとで 昏い11月に

由木 しげる

ふと眼醒めて
首都の街角で熱い期待をのみ込み
立ちつくしているきみ
行き交う女達の微笑の中で
不意にこみ上げてくる
思想コンプレックスのけだるい季節
に溶けることも出来ない決死行への誘い
ここは奇妙に明るいい日比谷
持たざる者の志向する疾走の感覚に
肉体のほてる
闘いへの苛酷な血流の刻み
彼に傷ついて午後
言葉絶えてよ、
いじましい風景を引き裂いて
行きたまえ
擾乱の赤旗の下
きみが風だ
きみの後景が呼ばれているのだ
途方もなく明日は永遠に明日となり
希望と化した精神は

青いアノラックから
カンガルーの母親のように
きみの存在せぬ子供をとり出そうとして
激しい不在に動揺するだろう
お花壇には花なく
空は果してこんなにも澄んでいるのだ

また踏みつぶすハイライトの
最後の煙がきみをかくす
天折へときみを駆立てる
飯空の橋がきみの精神の海に壊れ
待ちこがれてそこに溺れる
淋しい人影
だが違うのだ
待っていたのは目も眩む幻想の彼との
心中景色なのだ

眼を閉じて
化石のように座席の人と化し
首都の喫茶店の暗闇で口ずさむ
恋唄に
きみは勃ってくる
きみの時にやがて耐えることに慄えるだろう

血塗られた決意に躓いて
残骸をラデイカルに葬ろう
残された痛みが
きみの瘦身を鈍色の空の下にさらしたとしても
走り終ろうとする
きみの魂の慣性は
吃度無名の乱発力を呼ぶだろう
ふと帰ろうとする
死者の顔に刻印されたむごたらしい時代と交錯して
暴力を貪欲に愛した
昏い一月の首都で
きみは彼の視たものを視ることが出来るだろうか

十一月一日における

決定的決定

U

一日の昼過ぎ私は糟谷の下宿を訪ねた。秋晴れの天気の良い日だった。彼はまだ寝ていたが私の声を聞くと眠そうな眼をして起きてきた。「オイ、Oがまた病気で寝込んだそうだからちょっと彼のところへ見舞いに行かんか」と私が問うと「ウン」と頷いて彼はすぐ支度をした。二人は一緒に下宿を出てOのところへ向かって歩きながら話した。「糟谷、お前が大阪に行くというのを聞いたんだけど本当に行くのか」、「ウーン」と彼は生半可な返事をした。私はそれきり何も言わなかった。二人はだまって歩き続けた。しばらくして彼が「オイ、Oは寿司を食いたい言ってるから寿司でも買って行ってやらへんか。俺も昼めし食うてないし、ついでに食って行こうや」と言うので一緒に寿司屋に入った。寿司を食いながら世間話にいろいろと花を咲かせた後、Oのために折箱に寿司を包んでもらい彼の下宿に行った。病気が回復したのかあいにく彼は留守だった。「あいっどないしたんやろな」「あいっもう病気は良くなったんだらうか」「わからへんなあ」「これからどうする」「ひとまず俺の下宿にでも行こう

や。寿司も食わらんし……」と彼は私の持っていた寿司の入った折箱を指差しながら言った。「そうするか」と言ってもひとまず彼の下宿の方へ足を向けた。私達が彼の下宿へ引き返したとき時計は二時を少しまわっていた。少し落ち着いてくると、一一・一二日の大阪行きの件について彼と話さねばならないという考えが強く私をゆさぶった。その時、同じ家に下宿しているMが入ってきた。私達三人はそのことについて話す前に寿司を食うことにした。「お前これ食えや、俺はこれ食うわ」などと言いながら、あっという間に全部食べてしまった。食いおわると三人は早速話した。「一一・一三は俺にとってはやな、やるかやらんかの問題じゃなくて、やらんとあかんこととしてあるんや。漠然としてやらなあかんいうことはわかるんやけど具体的に自分がどういうことをやったらいいのか、さしあたって何をなすべきなのかという問題になるとまだよくはつきりとわからへんのかどな」

「問題は決意の問題に解消したらだめだということだ。政治的に明確な位置づけがなければならぬということだ」「だけど最後は決意の問題だろう」

「うん、最後はそうかも知れないけど、十分論理展開しきれないまま決意したんじゃナンセンスじゃないか」

「おい、宇野弘蔵はむずかしいこと書くな。この本の理論と実践いうとこなんかなんのことやらさっぱりわからへんわ」

この本というのは『資本論と社会主義』という本であった。おそらくその『資本論と社会主義』が彼の読んだ最後の本であらう。その本は、その日の一週間にクラスのコンパがあった際、町の本屋で買った中の一冊で、彼はこの時レーニンの『国家と革命』なども買って帰った。

「結局、理論というものは自己完結性を持つものではなく実践によって検証されねばならず、必ずその中でさらに発展されるべきものだということじゃないか。だから理論を実践の中に位置づけ両者を無限の循環形式のなかに統一するということだな」

「うんそういうことや」と彼は茶化すように言った。

「だけどお前ようそんなむづかしいことおぼえたな」自分でもうまいことを言ったと思ったのだろう。「俺、これからこうやってやる。理解したとはいわんで、おぼえたなと行ってやる」とあの人なつつこい笑いを浮かべながら言った。彼の論理は常に「やらなければならぬ」から出発した。論理は常に立ちおくれ、「やらなければならぬ」をあとからあとから追いかけて行った。それはあたかも、論理の魔術で自分に言い聞かせているようでもあった。しかしながら彼に関して言えば、そういう次元ではとらえきれない何かがあった。彼のきしゃな体から、あの体の全身から流れ出る人間的な血潮は私に強烈な印象を与えた。彼は喜怒哀楽を自然のままに発することのできる数少ない人間として、ラディカ

ルなヒューマニストとして人間的に格段とすぐれたものをもっていた。そこから出発して彼は自分の感性的なものを理論化する方向に向かっていったことは、彼が発する前、これから理論勉強をする」といつていたことからも明らかである。それから彼は一〇・二一の大阪の様子などを話して聞かせてくれた。本を読んだりギターを引いたりして時間をつぶしたのち、私と彼とは二人して同じクラスのメンバーであるYのところをたずねた。もう日は暮れかかっていた。その時はまだ行くか行かないか決めかねていた様子で頻りに深刻な顔をして少し口を尖らせ気味に結びながらいろいろと考えていた様子であった。Yはしきりに、どういうわけでそういうのか忘れてしまったが、「行かないほうがいい。行かないほうがいい。」と言っていた。彼はほとんど何も言わずただ考えていた。丁度ラジオから「……苦しみ抜いて……」というような詩とともにメロディイが流れていた。「今の糟谷の心境といっしょだな」と言うニコッと笑って「消耗すんな」と言った。コーヒーを飲んでから七時ごろそこを出た。一緒に歩きながら彼は言った。

「俺にとってはこの問題は人間としての問題だやっぱり大阪に行くことにする。まあ逮捕されたら逮捕された時のことや。その時はよろしく頼むわ」「でも家との関係は」「うん捕まったらびっくりするやろな。家には全然話してないし。でも捕まったら家との関係もはつきりするやろ。俺のやって

確かな友人、その死

村上順一

ることも少しぐらいわかってもらえるかもしれん」それからまた彼と二人で三軒ほど下宿回りをして、その日は一〇時頃別れた。別れぎわに彼は言った「明日クラスで資金カンパ頼むわ。一二時に学生会館で待ってるから」その後彼は下宿に帰ってから同じ下宿のMらとともに夜遅くまで語り合った。その時彼は「一一・一三を闘わないと一一・一六・一一・一七が闘えない」と言っていた。おそらく彼は混沌のなかにある自己の性務を一一・一三闘争のなかに見出したのであろう。

あくる日私は二時限目の英語の講義の前にカンパを集めた。全部で一、七〇〇円ぐらい集まり早速学生会館の彼のところへ持っていった。「こんなに集まったのか。千円ぐらい集まれば上出来や思ってたのに。すまん、すまん」と言いながら彼はそれを受け取った。「散らかしてるから、これから下宿へ帰って整理をして行こう思ってるんやけどな」「うん、そうか。じゃあ別に言うこともないけど、捕まるなよ」「うん。だけど俺捕まるような気がする。まあ逃げる時は一生懸命逃げるわ」彼は笑いながら言った。「じゃあ気をつけてな」「じゃあ、今から思えばこれが彼との最後の対話になってしまった。永遠に彼との対話は取り戻せないほど遠い世界に彼は行ってしまった。彼のあのふてくされたような顔と人なつっこい笑顔が私の眼前に重り合うとき、「ああ彼は死んだのだなあ」という気がする。

一一・一三、一一月佐藤訪米阻止闘争激動の五日間の第一日目、大阪府岡公園でのあの熾烈な闘いの真紅の炎の中で国家権力暴力装置＝機動隊の汚れた手によって虐殺された糟谷さん。

あの闘う主体を照し出す火炎ビンの第一の炎が市民社会のまっただ中で高く鮮明に燃え上がるその直前まで共に闘い、そして共に笑い会った糟谷さん。

糟谷さんは、ぼくにとってはあくまで一人の人間として再

び帰らぬ遠い世界の人となってしまった。

それは、情況にとつては不可避なことであろうともぼくには全くのハプニングでしか有り得ない。糟谷さんが大阪に出発する前の晩みんな話合った、その時には周りをつつむ重圧感など全くなく、ただ未知の闘いに臨む新鮮な感能のひびきしかわかわいてこなかった。それが、あの笑いの中にあるように堅い闘いの意志・決意が秘められていたなんて。

十・二一で闘いを組み得なかつた大阪の部隊のために今度闘わなければ、と言っていた言葉の中に。

しかし、今度の糟谷さんの死は糟谷さん自身にとつても悲しいハプニングでしか有り得なかつたであろうと思う。あの晩、各代表のアジ演説の充満する扇町公園で会った時も、一六、一七は岡山でいっしょにデモをやるう、と笑いながら言っていたし。

一〇・二一で闘いを組み得なかつた……という前述の糟谷さんの言葉が、糟谷さんが不帰の人となつてしまつて一〇日余りもの日々が過ぎ去つた今も明確に示していることは、糟谷さんは決してただ単に一一月安保決戦、激動の五日間の闘いの中で倒れていったのではなく、この世界階級闘争の、日本階級闘争の中で倒れていった、ということであろうと思う。それは、糟谷さんの死を六九年秋期安保決戦の中で決起し果敢に闘い倒れていったある英雄の死と捉える人たちが、又それを七〇年代階級闘争のふみ台にしようとするくわだて利用

しようとする人たちは、ただ単に糟谷さんの死を冒瀆する以外の何ものでもない、ということに通ずると思うし、そのような人たちは決して許すことができない。

糟谷さんの部屋から糟谷さんの灯が一切消え去つた今、糟谷さんの口からはもはやぼくたちに語りかける言葉は生まれ得ず、ただ残されたぼくたちから糟谷さんに語りかける言葉が生ずるのみであろう。

しかし、糟谷さんとの対話は今なお続いているし、この世界からぼくたちの肉体が消滅し再び糟谷さんとはけ合うまで対話は永遠に続くであろうし、続けねばならない。

今までに糟谷さんの残した言葉・行動の一つ一つにぼくたちが語りかける言葉が存在するであろうし、生前に数倍する重みを感じとり、くみとらねばならないし、その重みにたえ抜いてその言葉の意味を實踐しなければならぬ、と思う。その重みにたえ抜き実践することは、ぼくたちにとって非常に苦しい。ぼくらの道であろうし、糟谷さんが行なうとして行ない得なかつた安保粉砕・人間解放につづく闘争のくらやみの中で一步一步手さぐりで歩まねばならない道であろう。しかし、このことはなにも糟谷さんの歩んだ道をぼくたちが再び歩み糟谷さんの死に近づくと、ということではないし、なにも糟谷さんの目ざしたであろうと思う安保粉砕・人間解放の闘いに決起するということではなく、糟谷さんの死を自己の内に組み入れ各自の闘いに決起することであろう

と思う。

生前の糟谷さんの物質的な思いが薄れていく中で、一方ますます鮮明し浮かび上がることはこの闘争の中の一つの闘争人間、というイメージであろう。糟谷さんは確かに一年余りも続いた岡大闘争の中で生まれ育ってきた。しかしそれは、なにも日本革命のみ目ざすためにこの岡大闘争の中で闘ってきたのではない。糟谷さんは常に法科二一闘争委員会という大衆の闘争基盤を持ちながら人間的な視点から闘争にとり組んできた。糟谷さんは余りにも人間的であったが故に闘わねばならなかったのかもしれない。しかしこのことは、糟谷さんと共に生活したある特定な、一部分の人たちにはか理解してもらえず、他の人たちにはこの熾烈な政治情況の中で果敢に闘いそして倒れていった一人の英雄としてしか映らないことが（それはぼくにとって非常に悲しい、やりきれないことであり、その人たちに對して憎しみさえ覚えることであるが）現在明確となった。糟谷さんの死を知り、敵国家権力に對して憎しみを覚えるだけでなく何かを感じとり、自らの内なる心の壁に塗り固め得る人のみが真に糟谷さんの死を受けとめ新たな闘いに突き進み得る人であろうと思うし、そのような人がこの日本人一億の中に一人でも存在することを望むのみである。糟谷さんの人民葬がこの岡山の地で行なわれた今日、早くも糟谷さんはある人たちの間では伝説の人物となりつつある。K君が明確に述べたようにこの伝説を

粉碎しなければならぬ。しかし、どのようにしたらその伝説を粉碎しなければならぬ。しかし、どのようにしたらその伝説を粉碎できるかわからない。ぼくが今、生前の糟谷さんの事を思うたびにぼく自身糟谷さんの死を伝説に化そうとしているのではないか、と思われてしかたがない。このようなことを思うこと、考えること自体が伝説を造り上げ、あるいは糟谷さんの死を美化しているのではなからうか。本当のことを言うとはぼくには何もわからない。どうすれば糟谷さんの死を受けついで闘い得るのだろうか。わからない、ぼくには何もわかっていないのだ。

「しかし、これでいいのかショック」

糟谷さんコーヒー飲む？

「ウン」

糟谷さん、もう一時やで

「ウン」

「おい村上、たばこあるか」

「キヤア、キヤア」

さよなら糟谷さん

曇ってしまった秋そして……………

——個人的な「カスヤ」のイメージ

に基づいての愚かなる言語の歩行、

無意味な文字の書写——

袖岡諒也

太陽との同居を切望する、

赤蜻蛉は

四枚の翼を力の限り振動させ、

遮光する雲の抗ひ、

雲を飛び越そうとする。

曇ってしまった秋

その秋の雲は、執拗に 強権的に

赤蜻蛉を 彼がもつ常情を

笑殺し続ける。

己れより上に何物をも行かさぬよう

雲は己れの腹を満腹させようとする。

欲望を充足させるものを漁色する。

その時、偶然

雲は目前の赤蜻蛉に、

己れに抗おうとする

赤蜻蛉に触手を伸ばす。

汚ない水蒸気で濡れた触手を。

地上の全悪徳を吸い凝縮した水滴を栄養

として伸びる触手を。

突然
一瞬のうちに暗幕が垂れ下がるが如く、
秋は曇ってしまう。

太陽と空間とを遮断する雲。
その雲は笑殺する、
赤蜻蛉の太陽への憧憬を。

雲は褒章をちらつかす。
捕食に、欲望の満悦に対して
より安穩な高速道路を制定する為に。

虚辞を連呼し、
背後のどす黒い欲望に虚飾を施し、
狡猾さを隠蔽し、
巧みにちらつかされる
囀りの褒章。

赤蜻蛉は褒章を拒斥する。
極めて自然に斥ける。
常事である為

高速道路を疾走すること、
雲の差し向けた運転手付ロールスロイス、
ロールスロイスに深々と座り、
安眠貪りつ、
虚像の王国の門をくぐることに。
それは生き血を吸われること、
それは地獄
そう感触する赤蜻蛉。

赤蜻蛉が褒章に最後の訣別を告げる時、
その時

雲は、安直な欲望充足手段を解体し、
褒章の解任を行う。
より効果的なものの任命を為し、
強力な磁気を
雲は 赤蜻蛉に 浴びせる。

雲の辞令を受け、
新たに死刑執行者が登場。
職務の即製を期す、
邪欲の水蒸気から分婉され、
邪欲の水蒸気を栄養とし……
巨獣と化した
雲の分身は、
指向する……赤蜻蛉の撃墜を
己れの複眼に現像されるもの、
唯一の映像物を、
赤蜻蛉は観照する。
烈烈と 厳肅に
その認識過程は完成する。

魔障の映像物を飛翔……

それは
原動的感性への帰化。

だが……
複眼の複界に依然として君臨する魔王、
空間を満たす魔王の存在——ナンセンス
抗う赤蜻蛉は微弱。
四枚の翼は薄紗、それは……。
微震を出産するだけ。

巨大な魔王——雲の分身——は
捕食手段の最後のな階段を、
——気違いじみた物理的強制力の発動と
——いう血みどろの階段を——
一步そして 二歩……と、
踏み昇ってゆく。……

嗚呼
赤蜻蛉
肉体を喪失せしめられた赤蜻蛉よ。
靈魂は太陽と戯れている
視覚に感じないが確かに……

……嗚呼
赤蜻蛉は知覚されなくなった。
雲が勝利したのか？

自己完結できなかった

死の復権を

梶 鷹 司

その日、僕の一週間の家出の旅は終わり、不意に狂気と困惑の中で、君の死が僕を襲った。瀆言に「黙秘します。」と呟き続けて死んでいった君の警察写真は、あまりに苛酷だった。氏名不詳のテレビニュースのその写真は、僕に君を直感させずにはおかなかった。そして、君の死の告知は、僕を奈落の淵に陥れ、己れの生さえも、苛立たしきの中で否定せざるを得られなくする。

死んでいった事さえ確認できなかったであろう君の死は、この熾烈な階級状況の中ではまさに必然であったとしても、君にとって、それは遇然でしかなかったであろう。たとえ僕が、「君は死を覚悟して斗争に参加したんだ。」と、語気を強めて叫喚したとしても、それは君への賛辞でもなければ冒瀆でもない。単なる白々しい言葉の遊戯でしかないだろう。自己完結として存在できなかった君の生の不連続線は、君の恋人が、そして僕が引き受けなければならぬ。突然断ち切られた君の二十一年の感性の蓄積は、断じて君の肉体の消滅と共に消滅するものではなく、自律した存在として、常に僕はそれとの緊張関係を保ち続けなければならないであろう。

告別式の写真のあのふてくされた例の君の表情は、そしてあの優しい美しさを湛えた白い死顔は、一体僕に何を訴えんとしていたのであろうか。時代閉塞と自己閉塞の状況のただ中で、彷徨する僕達の中であって、状況との緊張関係を最後まで保ちながら死におもむいた君に、今だ自らの方向性を模

索している僕は、憧憬せざるを得ない。僕は、常に情況との緊張関係を欲しながら、しかもなおかつ、自分は本当にその緊張関係を保ち続けているのだろうか、たえず自問自答を繰り返しながら生きていくのだ。まさに生と死の弁証法的考察の中でしか、生を確信できぬ僕は、単純な「生きてる事はいい事だ。」という、ブルジョワジーの支配イデオロギ―なんて信じない。今日から明日への連続を拒否し、今日の可能性を追い求める僕達に、酷寒の冬は厳しい。岡大斗争が始まった冬は、七十年代へ向けての過渡期の冬へと転化する。凍てつく十一月の空間に肉体を抹殺された君は、いみじくも「僕は亡霊として十一月の墓地より出てくる」と叫んだ僕に、僕よりも先に答えてしまったのだ。岡大空間に残された僕達の、そして君の怨念は、日本中に世界中に拡散させなければならぬ。

四月十二日、あの劇的な闘いは、僕達の感性を飛翔させ、有本巡査の死は、僕達に死の新しい現実性と幻想性の崩壊を知らしめた。僕達に残された死の感覚は、硬直した恐怖の感覚でも、肉体の消滅でもなく、己れ自身に完結できぬ、確認できぬ感性の不恢復性の故の死の恐怖である。彼の死は、僕達に生と死の緊張関係と、生の絶対性の論理の幻想性を提示した。僕は、君の死と共に、彼の死の重みをだれよりも受けとめていただろうし、僕達の意識の鋭角は、完全に彼と君

の死の昏いベールを突き破っていくだろう。新しき階級情勢のただ中で、死の現実性を実感しながらも斗っていくかなければならない僕は、有本巡査の死を、徹底的に政治的に利用し抜いた支配権力によって、反革命として理論的にも、実体的にも武装を貫徹した機動隊を、まず全滅させなければならぬ。機動隊と僕達の対立関係を、君に最後に出した手紙に述べたように、まさに速まるか否かの関係から、殺すか殺されるかの対立関係にまで押し進め、転化させなければならぬ。

今日の僕達の死に対する感覚は、憧憬であり、自らの生の不条理性の完結である。「死は単なる『死』でしかなく、その上にベールをかぶせてかざりたり、偶像を作りあげてはなりません。死者は、もはや何も語らないのですから。死とは、人間を物質に帰することではない。彼女(彼)の死を、今後、私たちの(斗いの)中に意味づけ、生かしていくか、という問題を考える時、既に、死者と私たちの個人的かわりは消えてしまいます。」と、全共闘に参加していた姉を、睡眠薬の飲みすぎという事故死か自殺か分らぬ死因で失なった少女から、問題を提起された時、僕は困惑する。いかなる思想性を抱き、いかに果敢に斗ってきた者であったとしても、死は単に終末でしか意味はないのであろうか。僕は、死が己れの感性にとつて、いかに焦り跳ききったところで、単に終止符としてしか存在できぬ事を恐怖の中で認知するが故

に、己れの死の空想と、死者に対する徹底的な冒瀆の中で、自己と死者との鋭い緊張関係を創出しなければならぬ。

他者の、そして自己の死に対する実感としての認識は、けっしてありはしない。僕達にとって、君の不在は日常と化し、理性の中でしか君の死の理解はあり得ない。だとすれば、僕達は君の死の認識を、君の死の偶像性の中でしか、普遍化した存在の中でのしか保ちきれないであろう。僕達は、極めて冒瀆性の中に君の死の意味を導き出す。「死者よ、蘇れ。伝説と化した同志権、同志山崎、そして今まさに伝説の中にぬりこまれようとしている同志糟谷、蘇って自らの伝説を断て！」と絶叫する僕は、生々しい君の死の現実性をふまえる中で、自らの道標の原点として君の死の普遍性をかちとらなければならぬ。昨日のうたは必要ではない、明日のためのうたも必要ではない、僕達に必要なのは今日を闘うたなのだ。「死をひきづったひとつの生と、生をひきづったひとつの死が出逢えるのは、感覚のなかだけだ」とうたった吉本は、まさに、君と僕達との永遠の断絶とコミュニケーションを提示している。死者は、沈黙するが故に、この世で一番饒舌である。しかし、それはある限られた人達にとってである。僕達は感性を研ぎ澄ませて、君の昏い死の告知を聞かなければならぬ。今日を闘う事を、君に語らねばならない。

今は、冬

凍てつく空間の中で
少年は

同志の昏い死の告知に
耐えなければならない

怒りを
炎に転化できぬもどかしさに

少年は
狂おしく 悶えなければならない

十一月の情念を

中絶させられた同志よ

同志よ

恢復できぬ

君の感性の重みに

彷徨さえも許されない少年達は

不意に

光を失なった盲人達のように

復讐だ

復讐だ と

狂気の暴走地獄に出發する

ことばを

拒否しつづけ

沈黙のままに去った同志よ

同志よ

君のものをいわぬ饒舌は

死者達の奢ではない

少年は

言葉の虚妄を知る時

飢餓の渴望に

君の血の怨念を聞く

夥しい死者達の亡霊は

少女達の祈りを受けられない

同志よ

君のための祈りは

花でもなく

歌でもなく

沈黙でもない

少年達の雄辯だ

鎮魂歌は死者への冒瀆

少年は

幻の連帯歌

〈同志は斃れぬ〉

さえも拒否し

復讐だ

復讐だ と

新しき戦場に鮮血を捧げる

今は 冬

あらゆる季節は

虚妄なのだとしめる

酷寒の冬

肉体を抹殺された同志よ

同志よ

少年は

斗いの中で斃れた君に

羨望し

今日も 火炎ビンを投げ続ける

同志よ

少年の

権力に対する

戦慄する恐怖に

冬の風景はあまりにも昏い

けれども

少年の恐怖は
新しき闘いを孕む

少年は そのとき

すべての過去を拒否し

斃れた同志を乗り越えた

明日の

プロレタリア戦士と転化する

戦士となった少年よ

復讐だ

復讐だ

銃をとれ

斃れ去った同志よ

闘いに終焉はない

君とプロレタリアートのために……

君の死を知った時、涙に目をはらしたMの顔は、僕にとって優しい安堵だった。しかし、僕達はいつまでも君の死に涙する事は許されないし、涙する事によって君の死をとらえるならば、僕達にとって、君は単なる友人の死となってしまう。白々しい言葉の連続によって提起される君の死の政治的意義

不完全なひとり言

有馬 神

眠った家の白い壁が一月の夜空にくっきりと浮び上がり、凍てついた大気と離れようとしな。黒い静かな塊りとなった樹木は、人間の叫びなど総べて吸い込んでしまう。水は静寂の中に動きつづける。何ごともなかったように……。

自分自身の言語を、心の奥底から叫ぶことを主張して止まなかった君。君は炎の扇町公園で、己が思想性と肉体を歴史に激しくぶつけた。

糟谷らしい人が重体であるという知らせを受けてから佐藤訪米の一七日までの数日間、焦躁感と義務感さらに絶望感が身体の中を暴れまわった。そしてその後の空白。その間にも歴史は、僕の思考とは遠くかけはなれたところを、以前よりも光を増して走り出していた。時間と自己との距離の大きさをこれほど自覚したことはなかった。一個の人間として叫びつづけたはずの糟谷はいつの間にか、政治的場のみ安置されようとしている。種々の追悼集会、人民葬においての彼に對する英雄への賛歌。セクト主義。さらにセレモニーとしてのみの出席者。またこの歴史的反抗に對し権力は、その肉体

のみを語っても、それは僕達にとって、君が階級斗争で斃れた単なる一人の同志となってしまう。まさに、君を友人としても、同志としても持ちえた僕達は、現実性と普遍性の中に君の死をとらえかえし、己れ自身に、そして全ての人々に告げなくてはならないであろう。自己を中心にあらゆる問題を展開する論理構造を持つ僕は、君の死も、階級斗争も、恋人も、ひとつの空間の中でひとつの環として展開する。その時、君は恋をし、学問をし、遊びもし、そして、僕に想起される。そのトータルな人格を有した君が、あの激動の斗いの中で死んでいった事の意味を、僕達は今、普遍化しなければならぬ。そして、一人の有望な若者が、階級斗争のなかで権力によって虐殺された事を、僕達は全世界に叫喚しなければならぬ。痛恨の怒りをこめて。

今日の斗いは、まさに苛酷を極め、明日の僕達の生きさえも保証しない。しかし、僕達は、けっしてひるみはしない。そうして、自己完結として存在できなかった君の死を、僕達のそして僕の斗いので、君と僕達の斗いと死の完結をならしめなければならぬ。

僕達は、自己の内部にかされた、重い鉛となって沈滞する叫び「自己完結できなかった死の復権を」を、明確に意識化しながら、全ての人々に「昏い死の告知に答えよ」と、告げ、答を強要しなければならぬ。

を、思索・言葉・行動することを奪いさった。

死すべき汝は 死に往け

苦しむべき汝は 苦しみに行け

人は 幸福のみを求めて生きているのではない

汝の掟を履行せんが為に生きるのだ

苦しめ／死ね／

だが 汝のなるべきものになれ

一個の人間に

一個の人間に

あの日糟谷が炎の柱々の中で、青いヘルメットに包まれて、白く輝く天上を見上げて、何を考え、何に恐怖していたか今はもう誰も知る術はない。無気味な白い光を反射していたジュラルミンが、赤く燃えだす。それに近づくにつれて糟谷の顔が、肉体が恐怖で引きつる。何も聞こえない。叫ぶ為に。一個の人間であろうとするがゆえに。

俺が糟谷を通して《人間としての死―彼が好んでそこへ行ったことを意味しているのではない―》に直面した時、色あせたはずのこの詩が、重苦しく俺全体におよいかぶさって来る。完全なる限定を背負っているがゆえに、その帰結の厳し

さ、寂しさにおびえながら歩ゆまねばならぬ人間。

糟谷の肉体は、既にこの世にはない。さらにその思想まで、時間の彼方へ吹き飛ばされようとしている。彼の死を拒否し得るかどうかは、個々の問題である。追悼文を書いて、生前の彼を思い出し涙を流す人もいるだろう。又追悼を引き裂き権力打倒の斗争宣言を述べる人もあろう。自分にとって、彼の遇然の死が提起した問題に今後一つ一つ答えていく、としか言えない。この言葉も、あまりにもそれが重いゆえに、空ろに響く。

何ごともおこらなかつた様にまた冬が、廻って来た。しかし終りのない、昏く、寒い冬が。

— END —

悪夢

——十九才のエチユードとして

かつての糟谷へ——

朱 潜 峰

追憶

十一月の赤い血潮の中で、生の重みが疼く。東京へ／＼と求心する思惟の渦の中で、個が翻弄される。

六七年十月八日、一つの自由を追い求めた肉体が、抹殺された。十一月の日本は、今、無限に拡がる虚空を、馬で駆け巡っているであろう彼の呪咀で、血塗られた歴史を繰り返す。

〈時間的逆行〉

十三日で果てる生を、その小さな胸で反芻しながら、全的自由を欲した一個の肉体が大阪への乗車券を買う。

〈空間の飛躍〉

夜の帳が降りた、ピルの谷間から、冷たいペーブルメントを這ってくる、膚寒さを感じさせる十一月の風が、わずかな

体温を奪ってゆく。陰鬱な空気の流れて、はりつめていた焦躁が崩壊し、ヘルメットが、不可思議な重量感を共なって、

その存在を誇示する。何百もの青い服が、個を示すことを扱った眼で、赤黒い炎を発つ火炎壇の放物線軌道をたどる。

一瞬の時間の停止。すべての状況は、その僅な間に次の新しい動きへ向けて、準備する。

そして均衡は破れる。青い服の乱舞、多くの学生が、その瘦身を、青い服の中に消え去らしてゆく。

〈全てのストップ〉暗転

頭部から鮮血をほとばらせながら、三人の青い服と写真をとる。床の上に一滴・一滴と頬を伝った血滴りが、垂直に落ちてゆく。

「名前は何?」……「黙秘します。」

「住所は何?」……「黙秘します。」

「年令は何?」……「黙秘です。」

〈空白〉時間的空白

髪の毛を、みんな剃られてしまう。胎児のように他人のなすがままにされ堅いベットに寝かされる。白一色のどこにも影のない、消毒アルコールの匂いで充満した空。死刑執行人の如く白衣をまとった二・三人がメスを握る。その冷徹な眼

差しは、頭部のみ露にした白布の上を舐めます。

〈空転〉

死。すべてが消え去る。費いやした二十一年の時間が、なんの果実も実らせないうままに。

もっとも恐怖した死。自分以外の存在がそこにあり、しかも自分の姿はそこにはない。あてどない放浪が永遠に続く大宇宙で、その淵で、大きな火葬場で、最後の通俗性を焼き捨てられて、完全な死を迎える。

『革命を起しえず、死を迎えるすべて戦士諸君!』大宇宙より。

最後まで生き続けよ。生命体として神となるまで。全人格的喪章で全身を貼りつくし、怨霊の神となれ。

暴動が、恐怖が、全人類の心底を揺動かし、その価値観を覆えずまで、全無がすべての道徳規範となるまでに破壊を続けよ。

その時、君は完全に人類を超越できる。君には不条理の死しかありえず、自然死はそれ自身で自ら去ってゆく。神となる。

革命を内的・外的に志向する戦士は、数十年、数百年の未来へ、神となるために生き続ける。大衆は、君に恐怖する。ファッショだ／＼と。でも暴動に何の行動規範もないように、永遠に続く内的革命は、無目的な行爲を繰り返す。

〔時間的逆転あるいは進転〕

ある合理主義者に。

あなたは、自らの死を、三十億分の一の死として合理化することが出来ますか。

異邦人へ。

「きょう、ママンが死んだ。」「私は汗と太陽をふり払った。昼間の均衡と、私がそこに幸福を感じていた」、太陽からのがれえす。

彼の死が公けに、新聞で処理され、死刑執行の時、憎悪をもった人々が集まることで彼の孤独はいやされる。

でも私は、死を恐れる。ロマンチックな、プチブル的意味あい、に於てだと嘲げられても。死は、一瞬的にあまりにも多くの社会的就縛を断ち切る。

篠田正浩を通じて近松門左衛門へ。

自殺が反体制（反論確）の思考の発現であるなら。

心中が、肉体的・精神的関係よりの二個の存在に、同時に同一の思考過程を経させた後の行為であるなら。

その行為は、正に情念と政治の間に横たわる空間を埋める、反道徳的な価値を有するであろう。

続追憶

死の価値を、時間の経過からの歴史的なものに委ねるとし

十三間通り、三菱銀行前

路上の生活

路上の性交

路上の死

と、嘘ぶくグリーンベットが、懂しく、異邦人から逃避する。

烙印 Ⅱ (R)

ラセン階段を昇りつめた八階の

踊り場で、

突然発狂したRにとって

その空間は、

あまりに狭ますぎ、

息苦しすぎた。

真摯の光の流れは、Rに突入し

Rを透明な存在にし、

暗幕のうえに、一条のすじを

残して 消滅した。

白い水しぶきを

全身に浴び、

Rは、シルエットと化した

巨大な存在に、

石を投げる。棒をふるう。

たら、不条理な死を迎えた（不条理に殺された）彼があまりにも稀少化され、その死を悼む者は、皆が卑屈にならざるをえない。彼に、十一月の扇町で死ぬ必然性は微塵もなく、その死を告知する者は、一時的な運命論者にならなければならぬ。

すべての結末は、残った者に係る。そして鋭く解釈を求め。その個々のある部々を、神経衰弱者になさしめ、アルコオルに溺れさせる、またある部々に対しては、『革命的』を連発させる。

暗黒から、一条の光が再び差す時、彼の死は、アルコオルと共に、そして連呼の後の吐息と共に、体外へ排出される。

あてどなき魂は、再び虚無の平穩の中に帰趨し、そこに安住の地を築く。一切の外部の、俗界の騒雜を断つたその平穩の中に。

烙印 Ⅱ

人類の範疇にとどまることを無理じいされて、頽廢への道

程を辿る。

青天子ちゃん、乳房振って

武器をとれ

父なし子らに 号令する

一、二、三、四、八、

路上に出よ

美学的水準に達した

火炎ビンの爆発炎が、

すべての個体に

赤みがかった色彩を与え、

消え去ってゆく。

赤い脳漿で、黒い蟻が溺れ、

Rの存在が 抹殺される。

愚昧

少女趣味的な感傷の涙して、冷たい小粉雨の中での放浪。

すべてを忘却の淵に置き去ろうとする徒勞が、結末をむかえる時、その個には自虐しか許されてない事を知る。

『灯の下に団樂が恋しい、……豆腐屋の売声、巷の夕暮時、かつて僕もその世界に生きていたことがあった……兄の帰りを待ちわびている妹、僕の残した猫を相手に一日を送る老父。ああ小さき、清き、淋しき家庭、僕はそこに永遠に帰れないのか。……』

吉田大次郎『死の懺悔』

『ショウモウ』、『アール』が、肉存化を達しえないまま、歴史の必然性の中に、陰蔽されてしまう。苦虫を、口腔から

直接に胃液の中に入り込ませように、血液の中で煮え滾るイメージを、表出しようと、笑を忘れた顔を、ひきつらせ

る。自己の規範を、絶対神に委ねたとしても、自己の骨骸が、坊主地獄の渦の中にすい込まれていくのを見る時、主観的思惟の嵐の中で苦しみの声をあげる「肉」に直面しなければならぬ。言出でできない自己矛盾と、自己嫌悪に溺れ、無垢の胎児への変貌を憧憬する。母の子宮での安逸。無重力の世界で、活動を始める、赤い血をすべて流出しつくすまで。

愚昧の考察 Ⅱ-1

戦後の悪霊は、すべての思惟・思考・活動を掌握し、そこを原点としての行為しか、アクティブなものとして認めることを潔しよしとしなかった。戦争を現体験として保持することのできえなかった我々に、三百万の亡霊が、怨霊として大きな荷重を伴って係ってくる。血塗れた十五年が、虚飾に塗り込められて、形而上的な意味しか持ちえなくなる。六〇年が、歴史となり、今また六九年が、血潮をその歴史にふりそそぐ。戦後が、厚い紙片を、積みかさね、ナイフの一突きで、どす黒い血潮をふき出す。

愚昧の考察 Ⅱ-2

戦後は現代史なのだろうか。赤面しながら活動する我々に

に『カクメイダ』『カクメイダ』と嘯きかけながら。

非生産的思考

虚栄と共に、その生命を断とう。非生産的思考過程は、いかなる場合に於ても、その生命が抹殺される時しか、その存在は認められないのだから。

Ⅱ-1

罪なき人々よ。その原罪の重みに耐え切れず、嘯きの声をあげる時、君は神の姿を垣間見るであろう。創造主の乾いた心に、強い怒りを感じると共に、限らない賛美の声を贈ろう。

Ⅱ-2

虚構のうえに構築された小さな平穩が、唯一の衝撃により崩壊する時、人々は、再度の旅立ちを拒否し、自らの殻の中に閉じ籠ろうとする。再びあの悦楽を、そして苦悩さえも受け入れる資格がその個にない事を、知らされて。

Ⅱ-3

やわらかな初冬の日差しが、過去を甘美なヴェールの中に隠蔽する。諸々の心底が、唯一絶対神への求心的な渦の中に巻き込まれてゆく。

Ⅱ-4

人にそれ以上の推理を、憶測を拒否する所まで、我々は、すべてのへその緒を切断して、数多くの悪を犯して生きてゆ

それはあまりにも大きすぎる命題である。八月十五日価値の全転換を伴って、泥濘な思考を、戦後は始めた。

過去との関連を断ったところで、部々的にはあるが、ブルジョア・デモクラシーを、恐る恐る使い始めた。帝国主義が抹殺され、甘美な夢を貪り食う。物質的繁栄に忙殺されて、歴史は、「革命家」か、「知識人」のみが語る言葉に変化する。歴史の庶民的空白の間に、すべての情況は、世界情勢の中に突入する。支配権力の、そして資本主義体制の必然的帰結として、六〇年を、六五年を、六七年を、六八年を、そして六九年を生みだす。でもすべては沈黙。民主主義がその字面どおり、「民」が「主」として支配する対象を捜し始める時、権力者は、時間を停止する。時間を逆転する期を、冷静に推断するために。でもすべては沈黙。

全情況が流動を始める。内的・外的刺激に触発されて。でも雪崩は、表面のみ。

愚昧の考察 Ⅱ-3

戦後の思考法は、全分野に於て、「革命」をその生涯から内存していた。しかし永遠に肉体化されえないその言葉は、情況を捨象し言葉としての永遠性を追求していった。「戦後」を腐敗させ、形骸させたのみならず、六九年秋、「革命」は、その肉体化のために、一個の肉体を、生贄として昇華させた。亡霊は、飛翔する。時間・空間の障壁を乗り越えて。個々

かねばならない。生活とは、とりかえしのつかない所まで、罪を経験することなのだから。

悪夢は、醒めない。肉体を失った彼が唇を開き語りかける。

「一月一斗争ハ、ヤラナケフバナラナイダ。大阪ヘユカラケレバナラナイダ。」

一月一日夜の彼のイメージが、菊の中の黒棒の大きな写真と交差する。ダブルイメージの彼は、手を動かす。足を動かす。

無機体と化した彼は、同志に革命的に言いえないおもはゆさを感じながら、虚空へ昇天してゆく。

「ヤラナケレバナラナイ。」から何の必然性も生みだせず、緊迫感を完全成熟するまで胸に屈め、彼の肉体が捨象された肖像を、破壊すべく、人間糟谷を永久に追求する。

英雄でも、革命的死でも、むだな死でも、プロレタリアートでもない。糟谷は人間であり、あまりに善良すぎたというだけなのだ。糟谷の死は、人間の死であったが故に人に涙せしめた。

死の冒瀆は、単なる感傷よりも幾十倍もの価値を有するであろう。ただ後者をより好むだけなのだ。

最後に。死んだ人は、過去に置き去りにされる。生きてる人は、今の自分しか考えることができない。

重圧の下で

U

何人も奪うことのできない
一個の人間の生命を
いとも簡単に
権力は奪ってしまった。

何人も奪うことのできない
一個の人間の生命を
いとも簡単に
我々は考えすぎていた。

さまざま人間の
その人にとってはかけがえない生命を
いとも簡単に
我々は取扱いすぎていた。

彼の死は

罪深き我々に
今やっとそのことを
知らせてくれた。

我々の仮面は今やっとながされた。
我々は一歩前進した。
彼はさらに語りかける。

「沈黙―それは他者の死の肯定だ。
沈黙―それは自己の死の肯定だ。
たとえ命は残っても
生は死ぬ。

闘い―それは他者の死の否定だ。
闘い―それは自己の死の否定だ。
たとえ命は絶たれても
生は残る
ならば 諸君よ
我々は闘うべきではなからうか」
と。

の憂鬱なき限り 中から

徳 祐 聰

永遠に語るべき機会を失なった君
自己の生に対する精一杯の執着心も
権力の冷酷なる鉄の意志の前には
斯くも無力なのだろうか
暗黒の世界に君は無理矢理に閉こめ
られてしまった
その中に固く正座し、一点を見つめる
君の眼
何か悲しげに、しかし口元に微笑を
浮かべ 権力に対する怨念を

満身に発散させている
君よ怒れ
たとえ肉体は亡びようとも
君の情念は生きのび
徘徊しつづけるであろう
君は亡霊となりて
君を抹殺した権力に対して
君の怨念でもって
彼らの脳裡を攪乱せよ
君の全存在を賭けた闘争も
失敗に終わった
かくなる上は
君は君の怨念でもってしか戦えない
永遠に 権力に対して
亡霊の恐怖を味あわしめよ

永遠に語るべき言葉を失なった君
君の死を冒瀆しつづける俺を許すな
君の死をバーゲンセールしている連中を
許すな
君を暗黒の世界に入場券も持たせずに
送り出したのはこの俺にほかならない

俺は今愕然とする
人の死というものが
こんなにも計り知れないものであることに
君の怨念で俺の脳裡を焼きつくせ
焼きつくして廢墟と化せ

永遠に四四番の席を空白にしつづける君
ある人は言うだろう
君はプロレタリアの旗の下に死んだと
君はプロレタリアの為に死んだと
ある人は言うだろう
君はヒロイズムの為に君の存在を対価としたと
君は自己満足の為に君の青春を捨てた
私は言いたい
君は一人間として死んだに過ぎないと
君は君の理想に君の全存在を賭けたと
歴史の流れは
君の死を評価するだろう
しかし
君の死を評価することはやめよう
私はそれを望まない

彼岸の四四番の君
白夜にして俺はやっと覚るのだ
白々しい自分であったと
そしてもうむやみやたらとやりきれぬ
彼岸の彼方からでも
俺から奪えるものがあつたら
奪ってくれ

俺の心の中の『過去』の画面の片端に
ちっこい顔が浮かぶ
それはいつも付いている
そして時々
眼鏡の奥の眼は
憂をもって俺を見る

バリケドの中で初めて知った君
生き生きしていた君の眼に
なつかしきを感じる俺
君の死を自分のこととして捉えるのに
一瞬恐れを感じる俺
こんな俺でも
いつも親しく声をかけてくれたな――

大和の夢

志村牧雄

№5の君と№20の俺
君はひとりで行ってしまった
いや行かされた
あの黄泉に
呼んだって帰らない
なにしろ
この世とあの世だから叶わない
君の訃報に遇うまで
浮かれていたとは……
生きのこるものは
何とずうずうしいことか
物言いだけな眼をちらりと向けるだけで
死んでゆくものは
最初からそうであつたように
死んでゆく

静かに息づく大和の里
麗しき山々の間に 青くほのかな煙が立つ時
道行く人々は足を止め
聖なる神の誕生を心から祈る
死者の魂は、しばし大和の空を徘徊し
すべての人と自然に最後の愛着を示す。

造形の空間の一隅
火炎瓶と催涙弾が交錯し
すでに定型人形と化した人間が
自分を誇示せんがため苛立つ
いくら足掻いても存在は無、
愛の流通は 吐く息のごとく
求めんとするものは破壊

……
陥没の中から血が流出し
薄れゆく意識と共に年齢の中の意識が消えた時
純白の脳裏に一つの絵画が鮮明に映る
はるかな昔 大和の里 人々は歌い 自然は掌す
限りなき空間の広がり生命の陽炎は燃え
黒々と水分を貯えた大地は重い
ひと時喜びの涙を落とし、神に感謝の祈りを捧ぐ
大和の空、大和の夢、今もなお続く

継続される重荷

宿里 俊

感覚の世界が煩わしい
霧消し去ったあの人に
こくびを傾け、うなだれ
髪の乱ればかりが うろたえさせた

西の方を回ってきたあの人は
瘦せぎすの体に「汗」を浮べ
重荷を背負ったまま
隣室に 静かに入っていった

重荷を枕にしたあの人は
疲れまじりの冷汗顔で
寝入ってしまった

人は、重荷を背負ったあの人に
語ることすらしなかった
人は、重荷を背負ったあの人に
「その荷物は何なのですか」と
尋ねることすらしなかった

あの人はまだ朝早き頃
黙ったままで
汗と体臭と温りで
なおいっそう重くなった荷を
残して行ってしまった

人は、あの人の散華を
嘆息するばかりだった
あの人は should と must を
残したのではなくて
あの人は
汗と体臭と温りでまみれた
重荷をのこしたのだった

君と僕の対話

吉田恵太郎

情況に転倒している僕に君の△死▽があった。△死▽と言わず全ての存在の連関を正視しそして止揚しきれぬ僕にとって、君の△死▽は僕の人間としての存在理由が絶無に近い状態であることを露呈した。市井の人間は、人間として△生きて△いる様に思われる。それに比較して僕は。……でも悼む気持ちはそれだけでしかない。君の△死▽は僕の脳裏から遠ざかろうとしている。いや遠ざかってしまっていると言った方がよいかも知れぬ。

君と僕との親密な会話は無かった。それ故に彼岸の君に語りかけるのが、また△死▽に対して、悼むことが僕においては人間の業・罰なのかと思えば、なんと醜い存在なのか、自己嫌悪で全てを処理することは容易だ。またこれ程、醜いことはない。問題なのはこれから人間として如何に△生きる▽かだ。

君の思想と僕の考えには、相互に似て異なるところがあった。

君と最後の対話。確かもう一人の友人Aも一緒だったと

論理で全てを解決、ときには隠蔽しきろうとする権力の一貫性を暴露する必要がある。君の△死▽はまさに、その論理では、うむり去られようとしている。秩序は△死▽に対してさえも過酷。今、僕は、その一環に言葉の上だけの方便で対処しようとしている。「社会主義リアリズムに対する反社会主義リアリズム論は不毛で、しかもそれは、それだけでしかない」と吉本隆明は、言語にとって美とは何かの中で語っているが、君の思想と僕の考え方は全にこの点でギャップがでている。僕の幻想が真の幻想であると身を感じるまでは彷徨し続けるだろう。秩序を原点に戻すと言えば、君は笑ったであろう。しかし、それは、僕にとってはどうでもよいことだった。君は君であって僕は僕でしかないのだ。もちろんこの言葉を自由奔放な意味あい使っているのではない。君も原点が秩序によって抹殺されることを拒否しただろう。君の様に論理の飛翔を撰択することはできなかった。それに今も飛翔できずにいる。このことを君がどれ程、罵倒したとしても、僕は君の論理に反駁する力がないのだ。糟谷、

君の△死▽に就いて言葉少なにしか語れぬ僕。

君の△死▽に就いて言葉少なにしか語れぬ僕。

泥の上で踏まれ、蹴られ、穴をあけられ

君は死んだ。

人間よ・人間・人間・人間よ

思う。

「俺は後期から授業に出るかな」

「お前は、真面目に授業に出ていて、ある面で感心だな」

「どうやら俺はけなされているらしい」

「君は、よくもそんなつまらぬ勉強が続くもんだね。どうも不思議だ」

「矛盾を感じないか、矛盾を」

「そりゃ感じないことはないがね。僕は誰がなんと言おうがやめないね。でも今までの空白時間の中で感じたのだが、

既成のルールを超越する姿勢は持たない。」

「でもさ、そういう君の発言の仕方は、法があるからという論理をマヌーバするものでしかないよ。」等々が冗談を

ふまえての君との対話であった。

君の大阪での△死▽を聞いて、糟谷という人間を全部と言わないまでも知っていたが故に、それが現実の△死▽であることが信じられなかった。そして今なお君の△死▽がパラドックスな△死▽であるとは言えない。そう言えない人間の故に、君の△死▽を死としてか見ることができないかもしれない。△死▽の重みを言葉でつくり、いじくり回すことしかできぬ国家意志の様に僕は君の△死▽を言葉で表現できぬ。今、不可能であるだけでなく、永遠に不可能だ。

秩序の原点がまさに本質であるにも拘らずパラドックスな

汝は血も涙もないのか

秩序への蔑みのため

冷たいしうちを受け死人の様にベットに

放置されていた。

そこで別離され、挫かれた。

愛・愛・愛よ

君は飛翔した。全力を尽くして

それは本場に飛翔した

あの腐敗した秩序の動きをふりきるために。

目先の餌食にまみれた

犬が襲いかかる

裏切者・△僕▽がそれらの前に平伏する

殉難者たちの火の薔薇

パラドックスな矛盾にみちた情況のうち

悪逆な者が善き人々を追いつめる

こんなとき 日本人達よ、友よ、犬よ

隣れみもなく、また放しておくというのか

僕の反駁者 糟谷 さようなら

遙けき夜明けのために

青山進作

私は自己の、そして君の「弱さ」を認識できるが故に、君の「死」を賛美することはできない。私にとって君の「死」は、あくまで私の醜さを吐き出してゆく鋭いメスに留り、決してそれ以上にはなり得ない。そういう意味において、君の目指した（と言われている）「革命」と「私」との関係の中で、君の「死」は無意味だった——私はあえて厚顔無恥にこう言い放ちたい。

君の「死」は余りにも突然、余りにも偶然私を襲った。そして、その瞬間私の胸に生じた二つの感情——期待にさえ似た興奮と足元の大地が取り去られたような墜落感——は相関関係を保ちつつも、独自の軌跡を描いて私の胸の奥底へと追っていった——私の虚飾の外皮を一枚一枚剥ぎ取りながら、しかもその結果が玉ねぎを剥ぐ以上に虚しいことを知りつつ……。

一五日夜、全共闘、本部を封鎖——ただちに機動隊出動——封鎖解除。おきまりの形式。続いて迫力のないデモ、間の抜けたシユプレヒコール、性能の悪いマイクがアジる——
「われわれはア——怨敵機動隊を粉碎し——革命的戦士——糞谷君の死を乗り越えてエ——全学バリスタでもってエ——闘い抜かねばならない」——その間、襲いかかってくる複雑な悪感で全身を小さきぎみに震わせながら、私はじっと立ちつくしている。そうすることが自己の存在を確認し得る唯一の手段でもあるかのように、ひたすらかたくなに……。そんな私の内側の一方では、むき出しになった「理性の巧智」が強力に

働いている。自己合理化は簡単だ。私には、君の「死」と封鎖がなぜ直結させられるのか「分らない」のだから。と、突然私の心は「思考の中断」ということばに支配されている——

「われわれが行動を起す場合には必ず思考の中断を伴う。そして行動の『結果』が『意味』を持つ程それはあっさりとなされるように見える。特に個人個人の行動が一つの政治運動体を形成する場合には、一定の「思考中断→行動」のパターンさえ持つに至る。ここでは、運動体そのものが物神化され、それを支えるドグマが個人をがんじがらめに縛り、公然たる問い返しはタブーとなる。しかしながら、そのような状態は同時に、安易な「疎外からの解放」感を与えるが故に、個々人は強力な「思考統制(自主規制)」の中で逆に「自由」を感じるようになる。もはや「思想」は空洞化し、人間性までもが捨象される。そして、どのような個人も、一旦政治運動体の渦に巻き込まれるや、この一連の流れから逃れることはできない」

再びデモが始まる。『訪米、阻止/安保、粉碎/』没主体的、情況逸脱の瞑想にふけていた私は、再びなまなましい「情況」の中へ引き戻される。そうだ、私は「一七日に「何か」を期待している。いや何かが起らなければやり切れないと思っている。そして「奇蹟」を半ば信じ、内心微笑んでいる。一七日には、君の「死」を私とは別の次元で「受け継いだ」人々が、君を「乗り越えて」闘うはずだ。そして、君の

「死」は「乗り越え」られるかもしれない。ただ、そこでは君の「死」は「神化」され「私物化」され「消費」されるだろうけれど。

総括が始まる——「本日ウーわれわれはア——中央闘争に連帯し——岡山の地でエ——封鎖闘争を——圧倒的に——闘ったア——」私の全身を徒労感がけだるく包む。私の前で、最初から結末が分っていた劇が幕を閉じようとしている——どんなハプニングも伴わず、すべてが台本通り整然と、不思議な安堵と虚脱感を残して。きびすを返した私の背でシユプレヒコールがうつろに響く。「佐藤の訪米を全力阻止するゾォー/、全共闘は斗うぞォー/、最後の一人まで闘うゾォー/」——「はにかみ」さえ含んだその声がどんより暗い空へ吸い込まれていく。「夜明け」の微候さえ感じさせない暗黒の夜空へ……。

私はこの短い文章を書きながら、何度自己嫌悪に襲われ、ペンを投げ捨てようとしたかしかない。君の「死」を前にした今の「私」にはただ沈黙あるのみなのだ。ただ私は「闘士糞谷」の幻影に、もはや反応のない、私だけの微笑を送りたい——私が「生きている」故に、そして人生きたいVと志向しているが故に。

党としての闘争を

自己の闘争として準備せよ

速水明美

一九六九年一〇月二日

偉大な敗北のうちに幕を閉じたこの日の闘いは我々に何を提起したのか！

六〇年安保闘争以後、六七年羽田闘争を大きな日本階級闘争の質的転換点としつつ、六八年日大・東大闘争を基点とする全国学園闘争を媒介として反帝政治勢力が全力量を投入して準備し組織した六九年秋期安保政治決戦の登りつめる頂点の闘いとして位置づけられていた一〇・二一佐藤帝国主義政府実力打倒中央闘争！

六九年秋期決戦は明確に六〇年代を清算し、七〇年代をひきずり出すものでなければならなかった。

すなわち、六〇年代における階級闘争のイニシアを帝国主義ブルジョワに握られていた状況より明確には六九年二月の沖繩でのゼネストの挫折以後の過程にみられる訳だが、その様な階級闘争のヘゲモニー関係を逆転させる闘いとして、更には七〇年代日本階級闘争を実体的な権力をめぐる帝国主義ブルジョワと反帝政治勢力の全面的な攻防戦として、すなわち、明確に権力闘争の時代として引きずり出す闘いとして位置づけられなければならない重い歴史的使命を負っていたのである。

六九年秋期決戦の歴史的位置とは、ヴェトナム革命における闘ウヴェトナム人民の英雄的、革命的なゲリラ闘争の勝利に構造化されたアジア危機の進行と共に深まりゆく帝国

主義支配体制の根底的動揺期にあって、帝国主義者は七〇年代への延命策として欧州のNATOとアジアのANPOを二大基軸に帝国主義間協定としての集団協調型世界体制への移行を押し進めようとしている時、七〇年代アジア・大平洋圏反革命戦略として七〇年安保を「アジア抑圧安保」に再編、強化しようとする佐藤帝国主義政府を打倒していく、極めて反帝プロレタリア国際主義に置かれた闘いととしての位置であった。であるが故に、六九年秋期決戦の基本課題は「佐藤帝国主義政府実力打倒——首相訪米実力阻止Vとして措定されたし、五〇年六〇年代の日本階級闘争をまがりなりにも指導し代表してきた民同型圧力闘争II社民型政治闘争と六七年十・八闘争以降の階級闘争の典型的パターンであった街頭主導型、反帝政治闘争と大学全共闘運動を歴史的に止場するものとしての反乱型政治闘争——権力闘争に媒介・直結していく過度期階級闘争——として提起されていた。すなわち、我々が首相訪米実力阻止を課題とする時、それは明確に訪米以前に訪米不可能となる様な政治情況II帝国主義政府を互解せしめるような政府危機・政治危機を主体的、攻撃的につくり出すことにあった。反乱型政治闘争の波状的、連続的展開による訪米阻止、危機的状況の創出こそ六九年秋期決戦の基本目標であった。

反乱型政治闘争における「計画された戦術」として何が提起されていたのか。

六七年十・八羽田闘争以降の街頭主導型実力闘争の延長線上に六九年秋期決戦が決つて措定されるのではなく、明確に六〇年代階級闘争の総括を踏まえつつ六〇年代を清算し止揚する過程に六九年秋期決戦が位置づけられていたが故に、街頭における実力闘争の中で育ってきた反戦派労働者の階級闘争の質を現代国家独占資本主義国家の生産体系の環としての生産点II拠点職場に持ち帰ることを通じて、再度街頭に戻るといふ闘争形態が提起されていた。すなわち、生産点II拠点職場における「佐藤帝国主義政府実力打倒——首相訪米実力阻止Vの明確な政治スローガンをかかげた政治ストライキを提起する中で、職場反乱を準備し組織し、その職場反乱と全国街頭反乱を有機的に結合させることによって政府中枢に攻め登るといふ極めて明確な戦術であった。

帝国主義ブルジョワと反帝政治勢力の全面対決として日本階級闘争史上初めて「決戦」として提起された偉大な六九年秋期決戦は偉大な敗北のうちに終わった。その政治課題は明確には貫徹し切れなかったのである。

では、その偉大な敗北は偉大な教訓として何を我々に残したか！この命題が七〇年代に生きようとしている全ての階級戦士に問われた課題なのである。

この日の大阪は、北大阪制圧闘争として中電の拠点政治ストライキと街頭反乱の有機的結合として豪語されながら、

国家権力の圧倒的な暴力装置——機動隊の前に、登場した全共闘、反戦青年委を軸とする反帝政治部隊は圧倒的、大衆的な結集を勝ち取りながらも中電での拠点ストライキの挫折を軸として街頭反乱を組織することができず、決戦主体の質から言っても大阪に登場した部隊は全国的な主体の質とは明確に劣っていたのであり、みじめな敗北をまじした。岡山は一〇〇人以上にわたる突出した反帝実力部隊を首都中央闘争、北大阪制圧闘争に送り込みながらも、全共闘、ヴェ平連の部隊四〇〇人以上を結集させ、岡山における典型的な街頭反乱闘争を創出せしめる中で、岡山県警——暴力装置機動隊の徹底した強権的な弾圧は我々の隊列の中から四八人も労働者学生・高校生を奪っていった。

糟谷はこの日北大阪制圧闘争に岡山から結集し、敗北感を痛烈に味わっていたのであり、岡山に残った法科二——闘争委員会のメンバーは岡山街頭反乱の先頭に立ち三人の逮捕を出した。地方という限界性と岡山に残っていた決戦主体の質の相対的限界性の上に立っての一定程度の反乱の状況の創出に比較して、圧倒的大衆的に闘う反帝部隊を結集しながらも全く不毛に終ってしまった北大阪制圧闘争の葬式行列に糟谷は相当消耗していたと聞く。

一九六九年十一月十三日

一〇・二一中央闘争に先行する大衆武装闘争——全国学園反乱、国労を軸とした反合闘争、拠点職場における政治

一・一三闘争は繰り延べられた決戦として提起されつつも勝利に向かって最後のパーセントの可能性をも追求する闘いとしてあった。

情況の中で苦悩する己自身をみつめる時程むなしなものはない。自己保身にのみすがりついて閉塞状態に陥っている。

我々にとってではなく、僕にとっての未来は何であるか。我々にとっての未来は我々の後に続く誰かがあるということなのか。しかし、僕にとってはどうか。

一〇・二一の大阪は静かな葬式行列ではなかったか。参加したものの、あるいは秘かに期待を寄せていたものの全てを裏切った。消耗しないほうがおかしいではないか。

僕は政治的人間になることはできない。でも、僕を含めて消耗した人達を救ってやるにはぜひ一・一三に何か佐藤訪米阻止に向けての起爆剤が必要なのだ。

犠牲になれというのか。犠牲ではないのだ。それが僕が人間として生きることが可能な唯一の道なのだ。

抑圧するもの全てに災いあれ！

——一月八日付糟谷の日記より——

この糟谷の日記の中につづられている言葉こそが一・一三闘争の革命的意義を暗示的にであれ示していると言えないのではないか。

ストライキを結合させた街頭反乱と社会反乱の準備——に基本的に失敗し、秋期決戦の登りつめる頂点の闘いとして一〇・二一中央闘争を提起しつつも、それ自身が六九年秋期決戦の出発点とならざるを得ず、この一〇・二一中央闘争は帝国主義ブルジョワの先行的反革命攻撃のまにに敗北していかざるをえなかった。そして、一〇・二一中央闘争において権力との全面対決を構造化する上で、秋期決戦主体に決定的に要求されている課題として大衆武装を設定し、一・一三闘争は全国政治反乱として提起されていた。すなわち、沖繩——安保——訪米をめぐる全体的な政治宣伝により決戦主体の大衆的組織化をなしとげ、全国各地において反戦派労働者、全共闘争部隊の大衆的武装を拠点政治ストライキの志向性と結合させることによって全国政治反乱を準備するという課題を一・一三闘争において消化することによって、七〇年代のアジア抑圧の攻撃的戦略を日米安保に設定しそれをアジア抑圧核安保として飛躍的に再編、強化せんとする佐藤帝国主義政府の全政治戦略を沖繩問題を軸とする一月佐藤訪米政策を契機として全面的に暴露攻撃するという決戦の政治水準——政府危機への契機をつかみとることによって一・一六——一七闘争を明確に佐藤帝国主義政府実力打倒中央闘争として再組織化がなされなければならなかったのである。

六九年秋期決戦総体は二重に強いられた決戦として在り、

英雄的、革命的な反戦派労働者・農民・学生・高校生・市民によって最後の最後まで闘い抜かれた五十九年秋期決戦は、四千人にも及ぶ階級戦士を牢獄に奪い去り、ついに敗北に終わった。全面的な権力側からの先行的反革命攻撃の前に敗北を余儀なくされたことの原因はどこにあり、六十九年秋期決戦の敗北の総括から我々は何を教訓として七〇年代にひきずり出さなければならぬのか。

敗北の原因の第一は、決戦全過程を通じて首相訪米を焦点とするところの安保・沖繩をめぐる権力とのイデオロギー戦に我々が勝利できなかったことにある。

帝国主義ナショナリズム攻勢——七十二本土並み沖繩返還——と鮮明に対決し得る我々の基本的主張は、へ支配階級による沖繩返還策動は単に沖繩基地の現状固定化であるのではなくして、日米階級同盟の七〇年アジア太平洋圏における反革命戦略としての日米安保のアジア抑圧安保への再編、強化の決定的環である限りそれがどのような形態での返還であっても、日本とアジアの全人民の利益に真向から対立するものなのだ、というプロレタリア国際主義の立場でしかありえず、沖繩をめぐるイデオロギー戦はアジア革命の陣営に自ら立つのか、それともアジア反革命に実質的に加担するののか、として提起されていたのであった。しかしながら、「七十二年核抜き本土並み沖繩返還」として提起された帝国主義ナショナリズム攻勢と鮮明に対決し得る七〇年代日帝によるアジ

ア太平洋圏反革命戦略の中で押さえうる反帝プロレタリア国際主義の政治主張を十分に展開し切れず、従ってまた、佐藤帝國主義政府実力打倒のスローガンを全人民のスローガンとして普遍化することができなかったのである。

敗北の第二の原因は、六十九年秋期決戦総体を根底において潜在的に規定していたところの安保、沖繩をめぐる権力とのイデオロギー戦における政治主張の大衆への普遍化に失敗したことと相対的に捉えられるべき、秋期決戦主体そのものの未成熟と統合されなかつた政治的質の不均質に求められる。

全国的に純化された党派軍団と群衆化した戦闘の大衆への二極分解——このことは、秋期決戦主体が、敵権力から強いられた先行的権力闘争の質に真合うから対決をいどんでいった突出した少数の反帝戦士軍団と、その地平まで到達し切れない広範な反戦、反権力の意識性に裏打ちされた大衆とに鋭く引き裂かれたことを端的に示している。しかしながらこの分離が過渡期階級闘争に固有の属性であるならば、最後のには大衆武装へと帰結すべきかかる権力による分離の止揚過程として、新たな統合に向うべき重層的表现形態をいかに提起するかということではなければならない。六十九年秋期決戦において、全ての反帝政治勢力は自らの党派軍団を頂点とし、全人民の政治生活の深部に流れはじめた、自然発生的ではあられ広範な政治的潜勢力を土台とする、反帝政治勢力の創出し

得る一切の要素と可能性を有機的、全体的に編成し、それに新たな秋期決戦に課せられていた政治的基軸と表現形態を与えることに成功しなかつたのである。すなわち、その政治的基軸はプロレタリア国際主義に貫かれた拠点実力闘争であり、新たな表現形態は反帝統一戦線に結集する諸部隊のかかるプロレタリア拠点への総結集とそこを基点とする大衆的政府中枢進撃に措定されたことはほぼ確実である。

秋期決戦主体の不均質を語る時、全共闘運動が示した政治的分解、すなわち、その限界性を抜きに論ずることはできないだろう。先行的社会反乱としての全国学園闘争が輩出した全共闘運動主体が獲得した学園権力意志は社会的権力意志としてしか捉えきれず、大学治安法攻撃以後にみられる国家権力の全面的暴力的弾圧の前に敗北過程を歩まざるを得なかつたのである。全共闘運動の内過程において獲得された社会権力意志は自然発生的には国家の契機をわがものとする事はできず、この意味で全共闘組織の政治闘争機関化は秋期決戦主体たるためには余りにも決定的で致命的な脆弱性を具備していたと言えるだろう。

第三に、六十九年秋期決戦の政治的「敗北」を決定した根底的な要因は、秋期決戦総体を左右する基軸として設定されていたところの拠点職場における政治ストライキを中心軸とするプロレタリア的拠点政治反乱の挫折に求められなければならない。

反戦派労働運動は決戦の最終局面において「精鋭」動揺——

脱落Vの三極化をその弱さとして露呈させつつ、総体としては、未だ上半身においてだけ民同型労働運動を乗り越えたとすぎず、その下半身は依然として氏同型政治生活にどっぷりと浸り込んでいることをさらけ出したのである。反戦派労働運動はその緊急な課題として、生産点実力武装闘争に関する根深い民同的「常識」「慣習」を一掃しストライキ概念じたいを根本的に転換しなければならぬと同時に、運動の「要求」の概念じたいをも根本的に転換させ、日常闘争における「戦術」を深い思想と原理に裏づけされた「闘争」に高めていかねばならない。

以上の六十九年秋期決戦の総括を踏まえて、七〇年代日本階級闘争に足を一步踏み入れた現在いかなる重みを持って同志糟谷の死の告知に答えなければならぬのか。闘う反戦派労働者、全共闘に結集する学生実力部隊・高校生・戦闘的市民を包摂する反帝政治勢力が六〇年代日本階級闘争の清算を六十九年秋期決戦に求め、七〇年代日本階級闘争の幕明けを六十九年秋期決戦に見い出さなければならぬのと同様に、私にとって過去の全ての戦いが糟谷の死に包摂、吸収され、七〇年代への自らの飛躍も又糟谷の死にいかにかに答えるのかという意味において糟谷の死を出発点としなければならぬのである。

私自身は七〇年代日本階級闘争は次のように措定されてい

ると考える。

六七年一〇・八羽田闘争以降の革命的新左翼に領導されてきた日本階級闘争の以前とは根本的に自己区別される点は、改良闘争が改良闘争としてはそれ自身自己完結的な闘争として存在し得なくなり、プロレタリア独裁かブルジョワ独裁かというプロレタリア世界革命以外には階級闘争総体としての自己完結はあり得なくなつたということである。すなわち、総体としてのマルクス・レーニン主義的理論を基底にすえつつ、暴力革命の思想と六十九年秋期決戦における大衆武装の経験と模索の中から導き出される戦略的質に規定された武装を媒介として、恒常的に対政府対権力政治反乱を組織する過程で明確に「プロレタリア独裁かブルジョワ独裁か」の課題を設定し、「A権力打倒——プロレタリア権力樹立V」の鮮明なる意識性が獲得された権力意志に貫かれかつ導かれながら、全面的に権力をめぐるプロレタリアートとブルジョワの対決——武装蜂起として現出する権力闘争の質を内的にはらむ過渡期階級闘争が、秋期決戦が主体の質とは無関係に登りつめてしまつた階級闘争の質に規定されて演繹される七十年代日本階級闘争の規定なのである。

であるが故に、権力意志の内実を具体化させるところの、潜在的政治権力機関としての党形成、顕在化する政治権力機関としてのソビエト形成が、権力闘争に媒介、直結していく七〇年代過渡期階級闘争における階級形成の実践的課題でな

ければならない。更に七十年代過渡期階級闘争の組織論的構造を把握するならばそこに要請されている階級的使命は、党のための闘争、ソビエトのための闘争を党としての闘争として実践することではなければならない。

六十九年秋期決戦の主体として登場した全ての闘う学生・労働者は、運動構造総体における客観的位置は明確に階級闘争における前衛的存在であり、七十年代過渡期階級闘争における彼らの歴史的位置と任務は、自らが明確に前衛的存在であることを自己認識する作業を通じて、党としての闘争を主体的に担う部隊として党的結集——前衛党建設を志向しなければならぬことであり、そのような自己設定によってはじめて歴史の普遍性の中に自らを見出すことができるだろう。

以上論述したように、七〇年代過渡期階級闘争において党としての闘争を自己の闘争として明確に設定することが、糟谷の死に答える可能性のある唯一の道だろう。

最後に、現在の私の問題意識を集約して提起しておく。但し、問題提起の段階であって全面的な論理展開は今後の私の課題である。

七十年代の過渡期階級闘争が恒常的な対政府対権力政治反乱として提起されるならば、現代国家独占資本主義体制において、その政治反乱が市民社会総体をくつがえすような総反乱としての深さと拡がりを持つ時、それはいかなる運動構造

として闘争が展開されなければならないのか。この点が未だ十分に展開し切れていないと考えるのだが、少なくともその運動構造を实体化させていく時にその契機となるのが、現代国家を市民社会としての把握からどう捉えられるのか、という問題があると思う。すなわち、資本主義国家の揚棄としてプロレタリア独裁国家Ⅱ社会主義社会を捉えるのではなく、それは近代市民社会の資本家社会として頓在化するが故に埋没しているところの社会的生産有機体Ⅱ近代市民社会の全面的な内実の獲得として設定されなければならないだろう。近代市民社会の全体的構造の把握と社会の第一次形成としての市民社会と社会の第二次形成としての階級国家の内的連関の把握、更には国家の第一次形成と第二次形成の内的連関の把握が解明されなければならない。

断想

M・S

十一月十五日

朝の東京は、薄いモヤでその表情を隠していた。閑散とした新宿駅のホーム。習性的に新聞を広げた僕の心には、わずかな感動しか起こらなかった。ひなびたカエルみだった君の写真。「殺されたんだ。殺されたんだ。」何度心に叫んでも、僕の心は反応を示さない。静かに活字を追って行く。あまりにも急なあまりにも遠い、君の死。

駅の階段は急だった。たぶん下から三段目ぐらいだったろう。靴が滑った。不思議に痛みは感じなかったが、手をついた階段の石は、震えるほど冷たかった。新聞をザックの中に叩き込んで、出口へ向かう。無表情に手を出す。こちらも無表情に切符を渡した。

新宿。すべて灰色の世界。巨大なコンクリートの壁は、はつきりと僕を拒んでいた。寒い。寒い。寒さから逃がれるため、駆けようとしたが、僕はコンクリートに響く自分の足音からも逃がれねばならなかったのだ。人間がくる。一人、二人、三人……。これが人間という動物。すべての表情は一定化されている。おそらく、昨日も、一昨日もこの顔だったろう。明日だってこの顔だ。彼らは、昨日一人の人間がこ

の世から消えて行ったことなど関知しないことなのだ。たとえ新聞を広げたってわかるものか。彼らの表情は、すでに変化することさえ出来ないのだから。……岡大生死す。一一・一三大阪街頭デモで。……死んだのか。又デモで。

まだ寒い。僕はこれらの人間の横を、ザックを振りながら、力一杯駆け抜けた。

歩道橋の上に立って、見回してもお日様はなかった。無性に怒りが込上げる。君のためにも、僕のためにも、大陽ではなく、お日様が欲しかった。坂の上から自動車が何台も降りてくる。あちこちからゾロゾロと人間が現われる。僕の後ろを通過して行く。僕の下を歩いて行く。

君の死とは無関係に動くこの世界。そうだ、すべて狂気の世界。気狂いの人間が、気狂いの動物が餌を漁っている。必死になって餌を漁っている。君は狂気の世界と戦ったんだ。

君は、何の未練もこの世界には残さないだろう。君はこの世界を自ら捨て、正常な世界へ行こうとしたのだから。こんな世界なんて、ガリバーみたいな大男の足で、踏み潰されてしまえばいい。

新宿公園のベンチに座り、再び新聞を広げた。相変わらず君の写真はカエルだった。しかし僕の記憶の中にカエル以外の君の姿が映り始める。「おい。あまり無理して意気がるなよ。」「ウン。おかしいなあ、ふふ……。」

十一月二十日

僕は狂った世界から逃がれるため、汽車に乗ったはずだった。しかし、岡山の空も東京のそれと変わりがなかった。岡山大学。忘れようとした狂気の世界の名詞が、僕の拒否にもかかわらず、次々に記憶の中に復活する。ダメか。学館の前に君の名を書いた立看が置いてある。ナマエ。君だけはどうナマエなんか無くなったはずだ。こんな、人間がゾロゾロした中に書かれるナマエなんか、もう、とつくの昔に無くなったはずだ。

十一月三十日

あれから半月が過ぎようとしている。この世界に変化は全くない。寒かった大阪。寒かった東京。寒かった岡山。いつものまにか冬がやって来た。まだ、あの時以上に寒くなっている。

「偽善者」

暗黒の世界の片隅に一人座っている君。青白い蛍光は、すり切れた畳の上でかすかな息を続ける君を、眼前で照らすようにする。

蒼白な顔を鈍く色どりながら、一筋の血が脳天から流れ、面前に立つ十三階段の光を敏感に探知しては、凍結を急ぐすべて静。

君の過去を怯えさす。地獄の底のありふれた人間の、糸のような死の声はすでに消え、かすかな闇の振動が君の口唇を震わせる。

君の今いる世界は死の世界ではない。君は息をしている。君の目は確かに開いている。

君の座っているその床の下は地獄の世界。十三階段の向うに見える光は、地獄からの光。地獄の血が、地獄の息が薄い床の下から君を誘う。

君は何故、そんなところに一人座っているのか。闇の寒さに震えながら、何故動こうとしないのか……………。

君の頭から血が流れているのを僕は知っている。静かに流れている。

血が流れる。血が垂れる。

山間の湖にうつる一本の枯木を流れ、赤茶けた土壁の無数に広がる日割れの中を下り、冷たい朝の歩道の石畳を濡らし、ネオンに沸く町の街灯を消し、暗黒の地の世界ですでにミイラと化した一匹のミミズの血管に静かに流れ込む。
(一日……五日……………。十三日……………。)

血が流れる。血が垂れる。

秋の日、散り積った葉脈を腐敗させ、冬の日、ガサガサに凍りついた川のウナギの尻尾を噛み、春の日、自分の世界を歌おうとするタンポポの根を食い荒らし、夏の日、ギラギラに輝く、海の青さに溶け込む。そして再び、秋の日、地中のミミズは、悪魔の胎内で芽生えようとする、白ユリの球根のように、地上の光に絶大な怯えを見せながらも目を開く……………。

糟谷君に

〈詩人〉 藤原菜穂子

きみの眼が夢みた都市

きみの眼が夢みた自由

きみの口びるが夢みた言葉

おゝ そして

わたし達が夢みた

自由と愛と言葉

わたし達のいきいきとなる国

けれど

きみは もういない

きみは もういない

きみの首から血は抜きとられ、

鋪石がまるで 心臓のように

ふくれ上り 血を噴き出し、

とても絢爛と十一月は星たちを浪費した、

まるで気違いじみたスピードで、

星くずと祭りと 人殺しの火の粉が

パチパチとはじけ燃え上り、

壊れた牛乳瓶の破片と

若い熱い男たちの血が流れつづけた。

夜と夜の谷間に流れつづけた。

くらい空の奥に

金色の小鳥たちが 舞い続けた。

きみよ
Kよ KよKよ

路上にチューヴのように横たわり血を流す男よ
泥水のなかに輝く男よ

あるいは無名の都市である男よ

黒い水のジープよ

時代の息子たちの熱い種子よ

きみは

自分の夢と肉体を探して、

拡がりゆく自己の血潮の海に倒れた。

ざらざらの砂と血と泥でよごれた鋪道が

きみの棺。

折れた首と死が

太陽のように燃えくるっていた。

はじまったら最後

けっして終ることのない

太陽のように怒り狂っていた。

中断はどこにもない

走れ ジープよ

黒い水のジープよ、

したる血の首よ、

すべての男と云うロンリー・マンの

もゝのつけねには、
黒い薔薇のつぼみが 慄えながら
開こうとしているのよ。

けれど

きみは どこにもいない

きみは どこにも

いないではないか、

今日どんな葬いの鐘が

牛のようになぐり殺された者のために鳴るのか、

彼の生の首を、傷痕を、

血の流れる道を、

警棒のふりあげられる道を

白い布でおくってはならない。

どんななくさめの言葉も消えてゆくだろう。

きみを抱きおこす

どんな手も腐ってゆくだろう。

今、自分の死へと歩むきみの前では。

だが 母親たちは頭を起す。

雨と泥と血が

彼の口から眼から流れこんでゆく。

地獄のソースのぬかるみに、

けれど

きみは もういない

きみは もういない。

〈一九六九年十二月十四日〉

彼の肉体が沈んでゆく。
みつめる わたし達の眼の前で、
それが、
わたし達のけっして触れることの出来ない
怒りと悲しみと 狂気で
一面に覆われてゆくのがみえる。

何と云っているのだ

その もの云わぬ歯は、

何と云っているのだ

その眼の中に立てられたローソクは、

いま 頭蓋から切りとられ、

差し出される

垂直の首は、

幻のように美しい血の薔薇は。

きみの眼が夢みた都市

きみの眼が夢みた自由

きみの口びるが 夢みた言葉

おゝ そして

わたし達が夢みた

自由と愛と言葉

わたし達のいきいきとなる国

〈後書きにかえて〉

「これでいいのか。／諸君。／」

—糟谷孝幸の言葉より—

「黙秘します」

—曾根崎4号—

発行者	コムネの会
責任者	志村牧雄・宿里 俊
連絡先	岡山市津島 岡山大学学友会気付 電話岡山(0862)◎1111内線790

岡山大学法科2の1闘争委員会

コムネの会